

日本の観光地理学研究におけるフィールドワークに関する一考察  
A discussion on field work in geographical studies of tourism in Japan

呉羽正昭 (筑波大)  
Kureha Masaaki

キーワード：フィールドワーク，観光地理学，データ，聞き取り調査，観光目的地，観光行動

## I. はじめに

観光はさまざまに定義される。漢字で記される「観光」と、カタカナの「ツーリズム」が、異なるニュアンスを持つとして扱われる場合もある。世界観光機関（UNWTO）によれば、「ツーリズムとは、連続する1年を超えない範囲で、レジャーやビジネス、その他の目的のために、日常生活圏外に旅行し、また滞在する行動」と定義されている。一方、観光もしくはツーリズムには産業、すなわち観光産業を指すという定義も存在する。このように、観光もしくはツーリズムさまざまに定義される現象であるが、以下ではこうした現象を単に観光と記述する。

このような性格を有する観光と地理学との関係を考えてみよう。その際、観光は人びとの空間的な移動を伴う行動であること、また特定の場所・地域が観光目的地として観光者を受け入れることが、地理学で観光現象を分析する際の重要な研究視点として指摘される。地理学者が観光に関連する事象を分析するために、調査を通じて分析材料を収集しようとする。その際には、多くの場合、観光目的地で調査することがなされる。そこでは、観光資源や観光関連施設の分布、関連施設の景観調査などが実践される。加えて、聞き取り調査も重要な地位を占めている。聞き取り調査の対象は、たとえば、観光目的地に存在する観光協会や関係施設の責任者、宿泊施設の経営者、居住者などである。もちろん、時期によっては、観光者に直接聞き取り調査がなされる場合もあろう。

しかし、おのおの地理学者は、分析のためにさまざまな方法で、さらには独自の方法で調査、もしくはフィールドワークを行ってきた。これは観光地理学のみならず、地理学全般に共通して指摘されることであろう。本研究は、観光地理学の既存研究を対象として、そのなかでどのようなフィールドワークがなされてきたのかを検討し、観光地理学研究におけるフィールドワークの特徴の一端を考える。

研究対象は、1960年以降に日本で刊行された査読雑誌に掲載された、観光地理学分野の論文とした。具体的な査読誌は、地理学評論、人文地理、地学雑誌、経済地理学年報、季刊地理学、地理科学、新地理、歴史地理学の8誌である。これらは、日本の地理学界を代表する学会が刊行する学会誌でもある。

検索に使用したデータベースは、科学技術振興機構の J-Stage と国立情報学研究所の

CiNii で、2013 年 7 月に全文検索を実施した。検索語は「地理」と次の語とをそれぞれ組み合わせたものである。すなわち、「観光」、「ツーリズム」、「リゾート」、「余暇」、「宿泊」である。内容的には、自然地理学的な研究成果は除外し、人文地理学の研究のみを分析対象とした。さらには、当該論文の主要な分析内容が観光現象と関連する文献のみを取りあげた。つまり、たとえば、農村に関する研究で、主要な分析は農業であり、副次的に観光業が分析された研究は除外した。

また、本研究では日本における観光地理学でどのようなフィールドワークがなされてきたかを重視するために、日本の研究機関等に籍をおく研究者による研究を対象とした。また、本格的なフィールドワークの有無や内容が確認できない例があるために、発表要旨や数ページのみのものであるフォーラム記事も除外した。その結果、114 論文が選択されたが、フィールドワークを含まない研究 11 件（展望論文と総論等）が除外され、103 件が分析対象とされた（第 1 表）。

## II. 対象とする論文の特徴

論文の刊行年の推移に注目すると（第 1 図）、1960 年代から 1980 年代にかけては、観光地理学に関係する論文が活発に生産されていたとはいえ、年に 1 本から 2 本で、刊行されない年もあった。それに対して、1990 年代以降、とくに 2000 年代前半には観光地理学の論文は多くなっている。論文数が年によって変動するのは、偶然である場合もあるが、2000 年代以降は論文の特集号が多くなっていることにもよる。とくに地理科学学会では秋季大会にシンポジウムを開催し、そのテーマとして観光に関連するものが頻発し、その成果が地理科学誌上に特集号として掲載されてきた。また東京地学協会発行の地学雑誌では 2011 年にジオパークに関する特集号が刊行された。いずれにせよ、そうしたシンポジウムや特集号出現の結果、観光地理学に関する研究は増加している。

103 件のうち 82 件は日本国内を対象としたものである。対象が海外に関する研究は 21 件あり、全てが 1992 年以降に出現している。その対象地域はヨーロッパが中心であったが、近年では東南アジアやオーストラリアなどのアジアにも広がっている。また、諸研究の調査対象地域のスケールに注目すると、狭い範囲の地域を扱った研究が多くを占めている。すなわち、ローカル（市町村レベル以下）が 62 件、中間（都道府県または地方レベル程度）が 16 件、全国（ナショナル）が 25 件であった。

## III. フィールドワークによるデータ取得方法

対象とされた観光地理学の研究において、フィールドワークによってオリジナルなデータを得る方法として最も多くみられたものは、聞き取り調査であった。全 103 件のうちで 73 件を占めており、およそ 7 割以上の研究において、聞き取り調査によってオリジナルなデータが得られていた。次いで多かったのは、統計取得（67 件）であった。それに続くのは、土地利用調査（35 件）、アンケート調査（17 件）であった。

### III-1 聞き取り調査

73 件の研究で聞き取り調査が用いられているが、その対象はある程度の共通性を有する。まず、多くの研究で、公的機関（政府省庁、都道府県庁、市町村役場など）や観光関連団体（観光協会、旅館（民宿）組合、温泉組合、ヨット（スキー）クラブ）での聞き取り調査がなされている。研究の地域スケールによって異なるが、それぞれの地域スケールに対応した公的な機関では、観光目的地や観光客流動等について、実態調査やサンプル調査などがなされている。そうした蓄積に基づいて、さらにはローカルなスケールでは職員的生活空間とも一致するために、公的機関の職員への聞き取り調査によって有用なデータを得ることができる。また後述するような統計も公的機関が整備している場合が多く、観光統計からみたその地域の性格に加えて、統計の性格や利用上の注意を聞くことが必要であろう。一方、観光協会等は、観光関連施設の連合体という性格のものが多い。したがって、その責任者や事務局との聞き取り調査を通じて、当該管轄地域の観光産業の全体像について把握することが可能となる。旅館組合等は、同業者集団ととらえられるが、関係する情報が集中していることが多く、たとえば旅館等に関する多くの情報を得ることができるであろう。ただし、観光協会や旅館組合に関しては、近年は未加盟施設が多く存在することに留意すべきであろう。これに類する聞き取り調査対象として、観光関係専門家があげられ、場合によっては観光協会の責任者を兼ねている場合もあろう。彼らは、特定の観光地域に関する地誌的な知識を有していたり、特定の観光行動に関する系統地理的な知識を有している。

一方、とくにローカルな地域スケールの研究では、旅館、民宿、土産物店、観光農園、スキー場などといった個々の観光施設において、聞き取り調査を実施することが行われてきた。それらの施設経営者から、当該施設の具体的な経営内容や顧客の特性を聞くことのみならず、近隣の施設、場合によって地区内全ての施設に関する情報を得ることも可能である。

研究例は少ないが、旅行会社も聞き取り調査の対象となる。「観光の構造」を考えると、主体である観光者が観光対象を訪れることになるが、旅行会社は両者を結びつける媒介の1つとして位置づけられる。パッケージツアーをはじめ、旅行会社とのつながりの強い観光形態、もしくは観光目的地においては、人びとの観光行動は旅行会社の経営と大きく関連しているためである。

以上の聞き取り調査対象は、観光者にサービスを提供する観光対象または媒介である。一方、主体としての観光者への聞き取り調査も実施されてきた。しかし、観光者の一般的な特性を把握するためにはある程度のサンプル数が必要とされるために、後述するアンケート形式での調査がより一般的に用いられてきた。

### III-2 統計の取得

観光地理学に関する研究のほとんどは、分析のために統計資料を利用している。一般に、統計の取得に関しては、過去と現在で状況は大きく変わってきた。データのデジタル化と

インターネットの普及によって、現在では研究室に居ながらにして、非常に多くの統計を入手することが可能となった。これは観光に関する統計についても同様である。観光庁設立後は全国的に統一基準での観光者統計の整備が進行している。また、国勢調査、経済センサス（事業所統計）、商業統計、交通関係の統計にも観光と関連する項目がある。

しかし、依然として、たとえばローカルな研究対象地域でしか得られない統計データもある。たとえば、それに該当するのはローカルスケールでの観光者数、観光施設数、顧客圏等の観光流動などのデータである。それらは市町村、観光協会、場合によっては個々の観光施設でデータを得ることになる。

### III-3 土地利用調査

土地利用調査もしばしば用いられる。その際、多くの研究でみられる調査は、あるスケールの地域において観光資源の分布、宿泊施設、土産物店、飲食店、共同浴場、博物館、観光農園などの観光関連施設の分布をとらえようとするものである。これを通じて、諸施設の分布にみられる集中・分散傾向などが明らかにされる。分析される地域のスケールに応じて、特定の観光資源や観光対象の地域的展開が示されたり、ローカルな地域におけるさまざまな観光資源や関連施設の位置づけなどが示されてきた。一方、とくにローカルなスケールの観光地域について、その性格を解明する手段として、土地利用調査は非常に有効である。観光地域の土地利用を分析することによって、観光に関連する土地利用とそれ以外の多様な土地利用との関係が解明され、また建物の高さや材質・色など、農地の色彩など、目で観察される景観の特質が解明され、観光地域を地誌的に把握することが可能となる。また、後者の場合には土地所有のデータも入手し、土地利用と土地所有との関係、観光地域の構造と土地所有との関係等も併せて考察されることもある。

### III-4 アンケート調査

アンケート調査は17件の研究で実施されたが、その対象は次のように非常に多様である。まず第1に、観光者や旅館宿泊者といった訪問者に対するものがある。これは、観光地域内で散策している観光者を対象に実施される例もあれば、特定の観光施設や交通手段の利用者、宿泊施設での宿泊客を対象になされる場合もある。宿泊施設等での調査では、その施設の賛同が得られれば、調査自体を依頼することも可能な場合もある。山村(1974;1995:262-263)には、その調査票の例がある。一方、GPSを利用して観光者の行動パターンのデータを得た研究もある。動物園の訪問者にGPS機材を渡し、彼らが園内をどのように回遊するのかについての空間データを取得した。

第2に、観光行動圏をはじめとする観光行動の一般性を追求するために、ある地域の住民を対象にするアンケート調査もなされてきた。しばしば使用されてきた方法は学校の児童・生徒に配布し、その保護者や家族に回答してもらう方法である。リゾートクラブ会員や案内所訪問者といった特定の属性を有する人びとに対して、観光行動や観光地域の評価などを訊ねる調査もある。

第3に、宿泊施設などの観光関連施設について多くの情報、たとえば宿泊施設の開業年や労働力など、を得るために、それらの施設を対象としたアンケート調査も多くみられる。その例は山村（1974）にみられる。ある地域で対象とする施設が少数であれば、全て聞き取り調査を実施することが可能であるが、対象が多数であればアンケート調査を実施せざるを得ない。アンケート調査後に、詳細に回答した方に聞き取り調査を実施する方法もあろう。ただし、近年、個人情報の取扱の厳格化が進んでおり、施設や個人のプライベートに関連する事項は、アンケート調査では訊ねにくくなりつつある。

第4は、観光地域に居住する住民に対するものである。研究事例は少ないが、農村空間において観光開発やルーラル・ツーリズムを居住者がどのように評価しているのかといった視点で調査がなされている。

### III-5 その他の調査・データ収集

また、現地でしか得られない文献や地図等の資料収集も重要であろう。市町村誌（史）や郷土誌（史）、とくに後者は現地以外では閲覧・入手が困難である。その入手には図書館訪問が欠かせない。図書館では、そのほか、現地のローカル新聞、郷土史会等による刊行雑誌・報告書、電話帳、住宅地図などを閲覧する際にも重要である。地籍図や土地台帳なども、現地以外では入手の難しい資料であるため、フィールドワークの際に収集が必要になることもある。

近年、観光者向けに刊行されるガイドブック、旅行雑誌、観光パンフレットなども重要な分析資料として認識されるようになってきた。ガイドブックや旅行雑誌は、全国的に入手可能であろうが、一部の観光パンフレット、現地の旅行会社主催のツアーパンフレットなどの中には現地以外では入手できないものもあるので注意が必要である。

## IV. 観光地理学の研究動向とフィールドワーク

### IV-1 観光目的地の研究とフィールドワーク

日本における観光地理学の研究に関する展望論文は複数ある（青木・山村，1976；Takeuchi, 1984；Ishii and Shirasaka, 1988；鶴田，1994；Kureha, 2010；呉羽，2011）。これらの論文で指摘されてきたことは、観光地理学の分野では、ローカルなスケールの観光目的地に関する研究が卓越することである。

1980年代頃までは、ローカルな地域スケールで観光地域の形成を分析することが主流であった。その対象は、温泉観光地、スキー民宿地域、海岸観光地などであった。そこでは、温泉旅館経営の変化、温泉所有の変化、土地利用と景観の変化、生業・就業構造の変化等に関するデータがフィールドワークを通じて取得されていた。こうしたフィールドワークでは、現地の有力者や観光関連施設等での聞き取り調査が重要な役割を持つと同時に、観光地域の土地利用と景観やそれらの変化を解明するために土地利用調査が実施された。また、それらの結果により厚みを持たせることを意図して、既存の統計や地籍図等の資料で

補足することが行われた。

これらのフィールドワークは、現在でも行われており、もちろんある程度の重要性を有する。とくに、現地でしか得られない情報に加えて、統計や文献を収集することが必要で、限られた調査時間内で当該資料にたどり着くことが求められる。現地では、それらも参照しながら聞き取り調査や土地利用調査を実践することが重要であろう。

一方で、観光目的地に関する研究にも、そのイメージを捉えようとする研究、目的地が有する結節点としての性格に注目した研究、目的地の風景に関するものなどが現れてきた。また、ルーラル・ツーリズムやエコツーリズム、まちなみ観光などの新しい観光行動パターンが出現するとそれに対応する研究も増えつつある。さらには、海外の観光目的地への注目も高まっている。

#### IV-2 観光行動に注目する研究とフィールドワーク

1990年頃から、観光地理学の研究対象はかなり多様化してきた。とくに、観光者の行動に焦点を絞った分析視点が重視されつつある。その背景には、バブル経済崩壊後の不況とともに、日帰り旅行が増えたり、社員旅行などの団体旅行の重要性が低下してきたことがある。かつては、宿泊施設が中心的な観光施設としての役割を果たしていた観光地域において、フィールドワークに基づいた研究が多くなされてきた。日帰り旅行が増えると、そうしたフィールドワークの重要性は低下している。また、上述のようにエコツーリズムやルーラル・ツーリズムなどの、いわゆるオルタナティブ・ツーリズムが重要になってきた。そのなかで、観光者に関するデータをいかに収集するのかが、研究の独自性を高めるのに不可欠になりつつある。こうした観光行動の多様化と連動して、研究内容に変化がみられるだけでなく、フィールドワークの内容もまた変化してきた。

かつて1980年代までは、観光行動については、主として観光施設関係者等から間接的に聞く方法がとられてきた。たとえば民宿で顧客の属性や訪問の季節性などを聞き取ったり、大規模旅館から集計データを提供してもらったり、宿帳を閲覧して集計し、顧客圏を分析することが行われていたのである。こうしたフィールドワークでデータが得られたのは、1950年代半ば以降に大きく発展したマス・ツーリズムの性格によるところが大きい。つまり、マス・ツーリズムが有する画一的な性格が、類似した観光行動をもたらしていたためである。しかし、近年は個人情報保護のために、この種のデータを得ることが困難になってきた。また、一部のデータではその信憑性に問題があったという事実もある。例外的に、1960年代、観光流動に注目した研究がある。中学生の家族に対する旅行先アンケート調査や、公的な観光流動調査を分析したものである。

観光行動の多様化とともに、観光地域の訪問者から直接聞く方法が重視されつつあると思われる。しかし、この方法を実践する研究はそれほど多くはない。調査期間が限られていたり、観光目的地で寛いでいる訪問者に対して、詳細な対面調査をすることが困難であるためである。これに代わり、観光者の行動パターンをみるために、既存の別の資料を利用する分析が増えている。たとえば、ガイドブックは多くの観光者が利用するものであり、

観光者はそこに記載されている目的地に滞在することを前提として、観光者の行動パターンを推測することができる。同様に旅行雑誌や観光パンフレットも利用可能であり、また旅行会社で販売されるパッケージツアーのリスト・内容も重要な資料として使用されてきた。つまり、観光情報をデータとして分析する研究が増えており、今後は人びとがインターネット上の観光情報を利用する機会が増えることが予想され、これをいかに分析するかという視点も重視されよう。一方で、そうした資料について、古いものを収集・分析した、過去の観光行動に関する研究もみられる。ただし、それらの研究において、分析の中心は既存資料を検討することであり、多くの場合、フィールドワークの中心は資料の収集であろう。

行動空間の地域スケールと観光目的地の性格によっては、GPSの使用も有効であろう。機材が回収可能な施設内では、訪問者の移動パターンに関するデータが取得できる。またインターネット上に存在する、位置情報が記録された写真なども分析対象となる。

## V. おわりに

本研究は、観光地理学における過去の研究を対象として、そのなかでどのようなフィールドワークがなされてきたのかを検討してきた。その結果、観光地理学研究におけるフィールドワークの特徴は次のようにまとめられる。

1. 1960年以降に日本で刊行された主要査読雑誌（学会誌）に掲載された、103件の観光地理学分野の論文を分析対象とした。その中で、フィールドワークによってオリジナルなデータを得る方法として最も多くみられたものは、聞き取り調査であった。全体のおよそ7割の研究において、聞き取り調査によってオリジナルなデータが得られていた。これに次ぐのが、統計取得、土地利用調査、アンケート調査であった。

2. フィールドワークの方法と観光地理学の研究動向とを関連づけて考えると、かつて1980年代までは観光目的地に関する研究が卓越し、そこでは聞き取り調査に加えて、土地利用調査が重要な役割を有していた。しかし、1990年頃以降、オルタナティブ・ツーリズムが発展してくると、観光行動は多様化し、観光者自体の行動を分析する研究の必要性が高まってきた。しかし、観光者に対してフィールドで聞き取り調査やアンケート調査を実施する研究に加えて、近年ではガイドブックなどに基づいて観光行動を分析するような研究も増えている。

3. 本研究の対象は、査読誌に限定されている。一般に、査読誌には学界の発展に大いに貢献したり、既存研究の間隙を埋める優れた研究が掲載される。しかし、観光地理学分野に限らず、多くの研究分野では、査読誌以外に掲載される学術論文も多い。さらには観光地理学分野に関しては、多くの調査報告がある。それは観光が身近な研究対象と認識されているためであろう。こうした研究にはローカルなスケールの観光目的地を分析したものも多い。そこでは、やはり聞き取り調査がフィールドワークの中心になっていると考えられる。

4. 今後も日本をめぐる観光の変化とともに、観光地理学の研究内容も変化することが予想される。たとえば、近年では国際観光が盛んになっており、外国人によるインバウンド・ツーリズム、日本人によるアウトバウンド・ツーリズムも新しい研究課題になっている。それらを分析する際にどのようなフィールドワークが実践されるのかについても興味深い。

#### 文献

青木栄一・山村順次 (1976) : 日本における観光地理学研究の系譜. 人文地理, **28**, 171-194

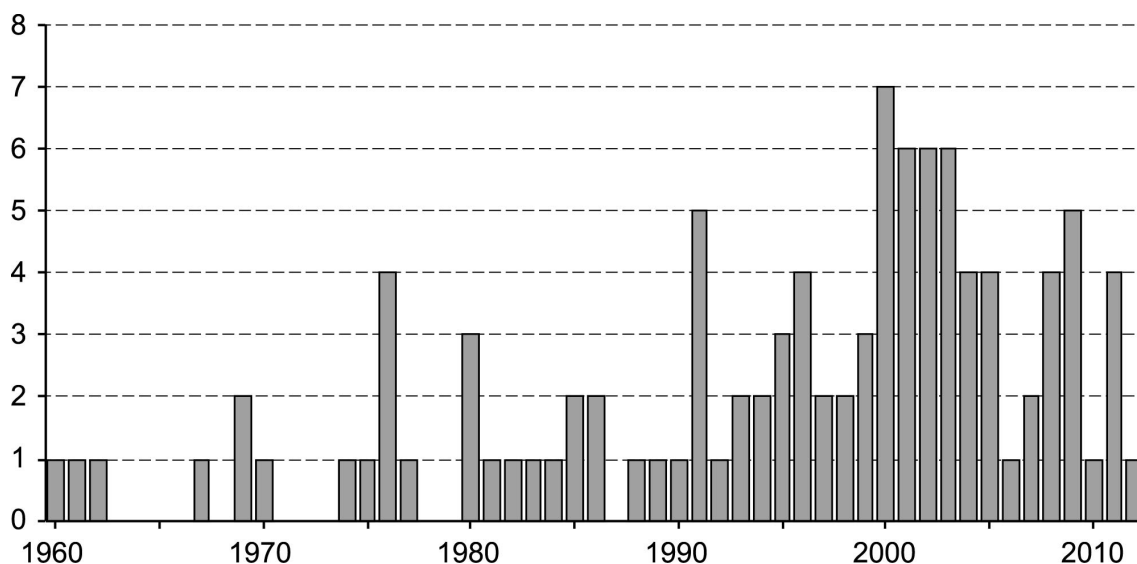
呉羽正昭 (2011) : 観光地理学研究. 江口信清・藤巻正己編『観光研究レファレンスデータベース』ナカニシヤ出版, 11-20.

鶴田英一 (1994) : 観光地理学の現状と課題-日本と英語圏の研究の止揚に向けて. 人文地理, **46**, 66-84.

Ishii, H. and Shirasaka, S. (1988): Recent studies on recreational geography in Japan. *Geographical Review of Japan*, **61B**, 635-659.

Kureha, M. (2010): Research trends in the geography of tourism in Japan. *Japanese Journal of Human Geography*, **62**, 558-569.

Takeuchi, K. (1984): Some remarks on the geography of tourism in Japan. *Geojournal*, **9**, 85-90.



第1図 日本における観光地理学分野の研究発表年 (1960-2012年)

8つの査読誌に掲載された論文による：地理学評論，人文地理，地学雑誌，経済地理学年報，季刊地理学，地理科学，新地理，歴史地理学



第1表 分析対象論文の概要

番号	著者名	発行年	フィールド	地域スケール	観光行動	データソースまたはフィールドワーク内容
1	小池洋一	1960	日本	中間	○	アンケート
2	小池洋一	1961	日本	中間	○	統計
3	野本晃史	1962	日本	国	○	統計
4	山村順次	1967	日本	国	○	国鉄利用者データ, 温泉関係統計
5	山村順次	1969	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
6	山村順次	1969	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史, 地籍図
7	石井英也	1970	日本	国		聞き取り, 統計, 民宿ガイドブック
8	淡野明彦	1974	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史, 地籍図
9	溝尾良隆ほか	1975	日本	国		聞き取り
10	白坂 蕃	1976	日本	ローカル		聞き取り, 統計, 郷土史
11	尾崎扇四郎	1976	日本	中間		聞き取り, 統計, ガイドブック
12	山村順次	1976	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史, 地籍図
13	田林 明	1976	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
14	石井英也	1977	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
15	小西正雄	1980	日本	ローカル		聞き取り, 統計, アンケート(住民)
16	山村順次	1980	日本	国	○	アンケート(温泉旅館)
17	淡野 明彦	1980	日本	ローカル		聞き取り, 統計, 郷土史
18	岩鼻通明	1981	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
19	白坂 蕃	1982	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
20	溝尾良隆・大隅 昇	1983	日本	国		聞き取り
21	Shirasaka, S.	1984	日本	国		聞き取り, ガイドブック
22	小口千明	1985	日本	国		郷土史
23	淡野明彦	1985	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
24	淡野明彦	1986	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
25	池 俊介	1986	日本	ローカル		林野利用, 聞き取り, 統計, 郷土史, 地籍図
26	田辺一彦	1988	日本	ローカル		聞き取り, 統計
27	内田順文	1989	日本	ローカル		統計, 郷土史, 小説
28	Saito, I. and Kanno, M.	1990	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
29	呉羽正昭	1991	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
30	石澤 孝・小林 博	1991	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
31	八木浩司ほか	1991	日本	中間		統計, ガイドブック
32	溝尾良隆	1991	日本	国		聞き取り
33	落合康浩	1991	日本	中間		アンケート(小学生の家族)
34	池永正人	1992	海外	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計
35	河野敬一	1993	日本	ローカル		聞き取り, 統計, 郷土史
36	神谷秀彦	1993	日本	ローカル		聞き取り, 統計, 郷土史
37	滝波章弘	1994	日本	国	○	アンケート(小学生の家族)
38	鶴田英一	1994	日本	国		聞き取り, アンケート(リゾートクラブ会員)
39	内藤嘉昭	1995	海外	ローカル		統計
40	滝波章弘	1995	海外	ローカル		ガイドブック
41	荒山正彦	1995	日本	国		文献
42	福田珠己	1996	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 郷土史
43	滝波章弘	1996	日本	国	○	アンケート(小学生の家族)
44	松村公明	1996	日本	ローカル		土地利用
45	溝尾良隆	1996	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計
46	フंक カロリン・淡野明彦	1997	海外	中間		聞き取り, アンケート(来訪者)
47	川口裕輔	1997	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
48	滝波章弘	1998	日本	国	○	言説(雑誌投稿欄)
49	森本 泉	1998	海外	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
50	池永正人	1999	海外	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計
51	岩鼻通明	1999	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
52	池 俊介・有賀さつき	1999	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史

番号	著者名	発行年	フィールド	地域スケール	観光行動	データソースまたはフィールドワーク内容
53	溝尾良隆・菅原由美子	2000	日本	ローカル		聞き取り, 統計, 郷土史
54	中山昭則	2000	日本	ローカル		聞き取り, 統計, 郷土史
55	鶴田英一	2000	日本	国		統計, ガイドブック
56	池永正人	2000	海外	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
57	池 俊介	2000	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
58	フンク カロリン	2000	日本	中間		文献, 統計
59	フンク カロリン	2000	日本	国		土地利用, 聞き取り, 統計, アンケート (来訪者)
60	神田孝治	2001	日本	ローカル		統計, 新聞, 郷土史
61	上江洲薫	2001	日本	ローカル		土地所有, 聞き取り, 統計, 土地台帳
62	池永正人	2001	海外	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計
63	佐藤大祐	2001	日本	中間		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
64	呉羽正昭	2001	海外	中間		聞き取り, 統計
65	若生広子ほか	2001	日本	中間	○	アンケート (仙台市北部住宅地の居住女性)
66	森 正人	2002	日本	国		郷土史
67	大橋めぐみ	2002	日本	ローカル	○	聞き取り, アンケート (案内所名簿・村住民), 郷土史
68	濱田琢司	2002	日本	中間		ガイドブック
69	浅野敏久	2002	日本	ローカル		聞き取り
70	中井達郎	2002	日本	ローカル		聞き取り
71	牧田 肇	2002	日本	ローカル		聞き取り, アンケート (ガイド組織)
72	佐藤大祐	2003	日本	国		聞き取り
73	滝波章弘	2003	海外	ローカル		アンケート (ホテル)
74	須山 聡	2003	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 郷土史
75	佐藤大祐	2003	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計
76	池永正人	2003	海外	中間		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
77	渡辺悌二	2003	日本	国		文献
78	矢嶋 巖	2004	日本	ローカル		聞き取り, 統計
79	Kureha, M.	2004	海外	国		聞き取り, 統計
80	落合康浩・水嶋一雄	2004	海外	ローカル		聞き取り, 統計
81	佐藤大祐・斎藤 功	2004	日本	ローカル		土地利用, 土地台帳, 郷土史
82	Maruyama, H., et al.	2005	海外	中間	○	土地利用, 聞き取り
83	富川久美子	2005	海外	ローカル		聞き取り
84	小原規宏	2005	海外	ローカル		聞き取り, 統計
85	浅野敏久ほか	2005	日本	ローカル		聞き取り, アンケート (ホテル, 宿泊客, 大学生, 市内企業)
86	中尾千明	2006	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
87	林 琢也	2007	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
88	横山 智	2007	海外	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計
89	鈴木晃志郎・若林芳樹	2008	日本	ローカル	○	ガイドブック
90	山口泰史	2008	日本	中間		アンケート (チャーター利用者)
91	井口 梓ほか	2008	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
92	小島大輔	2008	日本	中間		聞き取り, アンケート (来訪者), 統計
93	金 玉実	2009	日本	国	○	聞き取り, 統計, バンフレット
94	小島大輔	2009	海外	国	○	聞き取り, 統計, 旅行雑誌
95	石原照敏	2009	海外	中間		統計, 郷土史
96	呉羽正昭	2009	日本	国		統計, 郷土史
97	Cooper, M. and Erfurt-Cooper, P.	2009	日本	ローカル		聞き取り, 統計
98	有馬貴之	2010	日本	ローカル	○	GPS, アンケート (来園者)
99	大野希一	2011	日本	ローカル		聞き取り, アンケート (ジオツアー参加者)
100	菊地俊夫・有馬貴之	2011	海外	国		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
101	鈴木富之	2011	日本	ローカル		土地利用, 聞き取り, 統計, 郷土史
102	神田孝治	2011	海外	国		文献
103	Tran Thi Mai Hoa and Noma, H.	2012	日本	ローカル		聞き取り, 統計

8つの査読誌に掲載された論文による：地理学評論，人文地理，地学雑誌，経済地理学年報，季刊地理学，地理科学，新地理，歴史地理学